



官詩錦百事新聞第十号

東京浅草上
平右門町水没渡世

芝村久三の三人の子持て惣領を久次郎にして十才あり外は
 二人の女ありて以上五人の全員は暮しをたてて子を思ふ親心
 ぶらぶらと蝶を花に思ふ愛をよみて、西の海濱に遊んで女人を
 うらみわたるふえ三死にたがへて、平吉盡せし思ふは憎む
 嵐ふ手折られ花も實もまた焼く酒をアイト香かけ日く
 大酒とる酒柱の乱心あつたは、井戸へ陥り二階より抱かす腰はれ
 事不妻の異見も詮方なく子供と父の死抱かす妻の由りかきり、水
 没く歩行く働かすは、世に負苦の世渡り子供へ父を大事に
 預り母帰る文食をのりて、母子供の苦心をいそいで自ら
 孝子の奇事と合ふて家業を願ひとて事へらぬ
 御上様も知しては、様子さばめて御賞も
 りては、報知新聞のりり

編輯人友場吉太郎
 印刷人河田吉太郎
 大正十一年八月廿九日

長谷川

錦画百事新聞10号 文庫10-8618-10

